螺旋階段

恭也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
螺旋階段

【Ｎコード】
Ｎ４２３８Ｇ

【作者名】
恭也

【あらすじ】
「僕」はある日突然、死界の王の気まぐれで死ぬことが許されない体になってしまった。七十歳の寿命がくるまで死ねない上に次々と襲いかかる命の危険。死ぬ度に繰り返される時間……。「僕」は七十歳を迎え、望みを叶えることができるのだろうか。平穏に生きるため、「僕」は必死に“今”を生きる！

序章「僕と死界の王様」（前書き）

この小説はグロテスクな表現・暴力的な表現・ＢＬ的な表現を含みます。
というよりＢＬ小説になる予定です。
あらかじめご了承ください。

序章「僕と死界の王様」

僕は死んだ。
不思議とあまり痛くなかったが、代わりに胸が熱い。
撃ち抜かれた場所が、どくんどくんと脈を打つ。
目の前が赤く染まっていく。
どうして、と思う暇すらなく、僕の意識は無くなっていった。
アーメン。

――――という夢をみた。

全くなんと不快な夢だろう。
最近、同じ夢を何度も見ている気がする。
さらにいうと、最近、夢をみた記憶しかない気もする。
変に感覚の残る夢で、まだ胸がじんわりと熱い気がした。
というか僕、自分を殺すなよ。
だが自分が死ぬという夢は幸福を運んでくるという。
まあ、不快ということに変わりはない。
僕は嫌な汗をぬぐい、顔を洗った。
（何だったんだ、今の――――）
あまりよく思い出せないが、とりあえず殺されたのだ。
ぼんやりとだが僕は覚えている。
犯人の顔だ。
頬に傷のある、何とも特徴のある男だった。
夢の中の僕はどうやら銀行にいたようだったが、どうだったのだろう。
（そういえば、今日、給料日だ）

僕は定時制の高校に通っているため、昼は普通にアルバイトをしているのだ。
高校は１７時からという好条件のため本当に素晴らしい。
それなりに友人もいて、普段は僕を含め四人で活動している。
バイトは十時からだし、まだ二時間ほど猶予がありそうだ。
僕は記帳だけでも、と思い銀行に行くことを思いつく。
そして、途端に冷や汗のようなものが背中を伝った。
「……まさかね」
こんな夢が正夢になるんだったら、世の中超能力者ばっかになってるさ。
そう自分に言い聞かせ、僕はバイト用の鞄を持って家を出た。

外は少しだけ肌寒かった。
いくら四月で春の季節だといっても、寒いものは寒い。
とくに北海道の春は春といえる代物ではない。
　僕はそんな寒い中を十分ほど歩き続け、銀行へとたどり着く。
ＡＴＭは混んでいたが、窓口を利用するほどのことでもないので、僕はＡＴＭに並んだ。
（おっと）
人が多く、誰かにぶつかりかけて危うくで避ける。
（！　この、人……）
何処かでみた顔だ。
特徴的な顔立ち、頬には―――傷。
どくん、と一度大きく心臓が脈を打つ。
いや、でもありえないってば、僕……。
冷静さを取り戻そうと深呼吸した時だった。

バンッ

大きな轟くような音がした。
（え！？）
驚いて振り返ると、受け付け窓口にライフルの銃口を向けている男がいた。
先ほどの大きな音が銃声であったことをその景色で認識する。
辺りが騒然とし、数秒してから女性の甲高い悲鳴が上がった。
「騒ぐな！！」
もう一度、ライフルを上に向かって発砲する男。
それによりパニックに拍車がかかる。
受け付け嬢の一人が、そっと緊急用のボタンを押した。
それに気づいた男がライフルを女性に向け――――、

バンッ

発砲した。
途端に真っ赤な血が窓口のプラスチック板にはねる。
「変な真似する前に、金でも用意しろ。いいか？　これから不審な行動をとったやつは迷わず俺が撃ち殺す。わかったらてめーら全員その場で突っ立ってろ」
何だ、何でこんな……。
僕は今朝の僕の行動を激しく後悔する。
きっと今朝の夢は今日のこの事を予言し、僕に銀行に行くなと言っていたに違いない。
とすれば、僕はここで死んでしまうのだろうか。
「警察が来たら、おもしれぇショーを始めるぜ」

何がおもしろいものか、とツッコミを入れたくなる。
関係のない民間人である僕を巻き込まないでもらいたい、とすらも思う。
とりあえず何もしないでおくことにしよう。
そうすれば、もしかしたら助かるかもしれない。
だがそんな期待が甘いものであると、僕は直感で感じていた。
数分後警察が到着したかと思うと、入り口付近にいた僕を含む五人をガラスの壁から見えるように立たせ、そして一人ずつ撃ち殺し始めた。
「そこのお嬢さんよ、お前のおかげでこいつら死ぬんだぜ？」
ギャハハハハ、と笑いをあげる男。
おそらく精神病患者か、狂っている男なのか。
どちらにせよ、異常だ。
そんなことを思っていると、あっという間に僕の番になり――――
僕は撃たれた。
夢と同じだ。
同じ感覚が広がっていく。
悔しいのか、悲しいのか、憎いのか。
何がどうなのかはわからなかったけれど、理不尽過ぎると僕は感じた。
できることなら――、できることなら、この男なんかに殺されたくなかったなぁ……。
そんなことをぼんやり思いながら、僕はまぶたを閉じた。

「おい、起きろ。いつまでこうして何もせずに殺されるつもりだ？」
「……。あんた、誰ですか」
不意に聞こえた声にまぶたを開けると、そこには仁王立ちした男が立っていた。

全く見覚えがない。――はずなのだが、どういうことか見覚えがある。
「また記憶がとんだか。うむ、螺旋階段を創り出すのは難しいな」
というよりも、僕は死んだのではなかったのだろうか。
何故か僕は、宙に浮いていた。
また夢だったのか、それとも全て夢なのか。
まだ夢で、起きれてすらいないのか。
「まあいいだろう。説明してやる」
何故そんなに偉そうなのかまずききたい。
「貴様はこれから寿命がくるまで、必ず死へと誘う危険と向き合う。それはいくつあるかわからないが、まあ次から次へとくる。それらをクリアしなければ、貴様は永遠にその危険に殺され続け明日など来ない。人間本来の寿命だから、七十歳くらいまでだな。それまでに襲ってくるいくつかの危険を根性だけで突破してもらおう。何か質問は？」
長い。
そしてわからない。
一応わかったのは、僕はこれから何度も死ぬわけで、死なないようにしないと明日なんか永遠に来ないわけで、それは七十歳まで続く。……らしい。
「とりあえず、何で僕がそんなことを……」
「人間というのはときに根性だけでどんなことでも乗り越えてしまえる能力を持っているとあのバカが言っていたのでな。まあ観察するにはうってつけな普通の少年ということで余が公正なるくじで選んだ結果だ」
バカって誰だ。
ていうか、あんたは人間じゃないのか。
とツッコミを心の中でいれる。
くじの何処が公正なのだろう。
明らかに運が混じっている気がする。

「あなたは誰ですか？　というか、バカって……」
ふむ、と男は頷く。
「余は死者を裁く者。死界の王とでも呼べ。そしてバカは余の友人だ」
死界の王って……。
もはや意味がわからない。
僕は頭がおかしくなってしまったのだろうか。
とりあえず目が覚めたら全力で自分の頭を殴ろう。
もしくは電柱に頭突きだなと決めて、僕ははあ、と曖昧な返事をした。
「とにもかくにも、貴様はこれから先ほどの時間に戻り、あの危険を乗り越えるのだ」
「もしどれだけやってもできなかったら？」
「その時は死んでもらおう。ちなみに地獄だ」
そんな理不尽な！
と、ツッコミたかったが顔がマジなので唸るしかない。
というか、怖い。
「だが頑張って乗り越えれたのならば、貴様の望みを一つ叶えてやろう」
「望み？」
はっきりいうと、僕に望みなどない。
地獄は嫌だが、死ねるのならばどれだけ楽なことか。
だが地獄は嫌だ。
しかしやる気がでない。
おそらく、理不尽だからだ。
「貴様は先ほどの男に何の感情も持たなかったのか？」
「……そりゃ、僕だってあんなのに殺されたくなかったし、一発殴りたいですよ」
「では一発殴ってくれればいいだろう。それが出来るのが今の貴様だ」
にこり、と死界の王は微笑む。

そんな簡単な事じゃなくね？　と軽く思ったが、本人は軽いことだと思っているようだ。
僕にとってはもう重大なことだ。
「それに貴様は今、考え方によれば不死身になっているのだぞ」
不死身……。
心の中で呟く。
まあ確かに、死なないわけではあるが……。
と、気がつけば死界の王は僕の背後に立っていた。
「さ、行ってこい」
「え、ちょ、ちょっと！」
「忘れるな。貴様はやり直せる。貴様の選択次第で、誰も死ななくて済むかもしれないのだ」

序章「僕と死界の王様」（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4238g/

螺旋階段

2010年10月26日08時44分発行